とよなか国際交流センターおしらせ Vol.114　2018年10月号（2018年9月30日発行）

こくりゅうだより

大阪府立桜塚高等学校3年　平井　葉月
「ハロウィンはおいしいお菓子を作りたいです。」

台風21号について　災害のお見舞い

2018年9月4日に西日本に上陸した台風21号により、犠牲になられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。

当センターも台風の影響により、臨時休館となりました。6月の地震被害も踏まえ、今後も引き続き災害時の情報発信等、さらなる対策に取り組んでいきます。

皆様のご無事と、被災地域・被災者の皆様の一日も早い復興をお祈り致します。

世界と出会おう！味わおう！ふれ合おう！

第4回 とよなか国際交流フェスタ 無事に開催！

台風21号の被害も残る中、国際交流フェスタは無事に開催できるのか…。地域のみなさんは参加できるような状況か…。開催までにあれやこれやと検討を行いましたが、施設には問題がなかったこと、むしろ気晴らしの場を提供し、楽しい時間を過ごしてもらえたら良いのではないかということで9月8日、予定通り開催しました。

当日は人の流れが途絶えることなく、終始にぎやかな雰囲気でした。プログラムは、とよなか国際交流センターの登録団体によるステージ発表やポスター発表（発表に使用したパネルは引き続き、館内に掲示しています！）、バザー、世界の料理や飲み物の販売、子どもの遊びコーナー（魚釣りやスライム作り、世界の楽器体験）、民族衣装試着体験、茶道体験などなど。さらに最後には市や協会の職員、登録団体のメンバーが出題者として登場する○×クイズ大会。一問一問、正解発表と同時に歓声が上がるぐらい盛り上がりました。

もともと、国際交流センターの登録団体の活動成果の還元や情報発信の場としてフェスタを行っていますが、自分たちにできることや地域とのつながりについて考え、実感した一日でした。

※当日は、１階下の豊中市立男女共同参画推進センターすてっぷのライブラリーまつりと同時開催であり、さらにESDとよなか連絡会議によるスタンプラリー（同時開催のイベントなどをめぐりながら、各所に設置されたクイズに答え、景品をもらう）もあったことから、多くの方に足を運んでいただきました。

掘り出し物満載のバザー

ステージ発表の太極拳もバッチリキマってます！！

センター設立25周年記念 ○×クイズ大会！

こどもの遊びコーナーでは、魚釣りとスライム作り体験が大人気！

毎年人気の世界の料理販売

2018年度日本語ボランティア養成講座 レポート
第1回「ともに生きる社会をつくる～クロスベイスの生い立ちと取り組みから～」

とよなか国際交流センターでは、毎年秋に日本語交流活動にかかわる市民ボランティア養成のための連続講座をおこなっています。

9月22日（土）の第1回は、大阪市生野区で活動する特定非営利活動法人クロスベイスの金和永（きむふぁよん）さんより、団体設立の理念や、地域の子どもたちへの学習支援・体験学習などの事業についてお話をうかがいました。この日のキーワードは、「エンパワーメント」。日本語に訳すと「力を与えること」などの意味ですが、金さんはあえて意味を告げずに講座は進みました。そして、学力などの目にみえる「力」だけでなく、日々をどのように生きるのかを「（子どもたち自身が）自分で選択するプロセス」に焦点をあてながら支援をおこなっているということが語られました。

お話のあとは、少人数のグループ毎に「自分がエンパワーされた経験」について語り合い、「共感」「心を開く」「感謝」「自分らしい自分をみつける」…など、「エンパワーメント」について参加者それぞれの考える意味を出し合いました。クロスベイスの地域に根差した活動から、日本語ボランティアをする際の「支援」についての大切な視点を考えた２時間でした。

「嘘つきアーニャの真っ赤な真実」米原 万理著／角川文庫（2004年）

筆者の米原万里は、1959年、9歳から14歳まで、プラハにある在チェコスロバキア・ソビエト大使館附属学校に通った。当時ソビエト学校では、旧ソ連や共産圏から50カ国以上の多様な民族・文化的背景をもつ子ども達が共に学んでいた。本書に掲載されている３つの短編は、いずれもそのうちの１人の友人との思い出と大人になってからの彼女たちとの関わりを綴ったエッセイだ。

タイトルにもなっている「嘘つきアーニャの真っ赤な真実」は、少し大げさで理屈っぽいが憎めないアーニャとの思い出と、その後の彼女と彼女の家族の人生を筆者がたどるストーリー。幼い頃から各国を転々とし、ルーマニアには住んだことのないアーニャは、祖国ルーマニアへ帰ることを心待ちにしていた。ある日、アーニャが周りにとってはどうでもいいような、わかりやすい嘘をつく。大人になってから昔の住所を手がかりに、一旦帰国したものの祖国を離れたアーニャに会いに行くマリの旅の過程は、少しずつ、あの嘘の謎を解き明かしていく。

ミステリーのようでもあるが、当時の社会情勢や旧共産圏での人々の生活など、一人ひとりの生活に、フィクションよりも壮絶なドラマがあったのだと、興味深く読んだ。多様な民族や価値観のなかで青春を過ごしたマリの考察にもハッとさせられる。

（協会職員・山本房代）

＼Youは何しに国流へ？／ 第13回 センターで活動している人を紹介します☆

2010年に高校教員だった私は桜塚高校定時制に転勤してきました。定時制の高校には少なからず外国にルーツを持つ生徒が在籍しており、学校外の組織と連携したいと思っていたので、自然と国際交流協会との連携がはじまりました。今も連携したペルー・ネパール・タイにルーツを持つ生徒たちの顔が浮かんできます。

2017年に定年退職したあとは、若者たちの日本語支援という形でお手伝いさせていただき、この1年間でスコットランド、中国、ネパールにルーツを持つ若者たちを担当して今に至っています。日本語支援といいながら、日本語の学習だけではなく、雑談したり進路の話をしたりとゆるーい時間を日曜日の午後、2時間「こくりゅう」で過ごしています。

そんなゆるーい時間の中にも彼・彼女たちのしんどさが垣間見えてきます。日本語支援の先にあるものを見失うことなく、それでいて楽しむことも忘れずに、日本語の学習を柱としながら時間を積み重ねていきたいと思います。

若者の日本語サポート 講師
藤下 功一 さん

※若者支援事業では、15歳以上の外国にルーツを持つ若者のための居場所づくりを様々な角度から行っています。
毎週日曜日（第一週除く）は「若者のたまりば」「若者日本語サポート」の活動をしています。

コラム　少しだけ北の国から@福島　辻　明典

協会事業（哲学カフェ、プロジェクト“さんかふぇ”等）に参加していた辻明典さんが、2018年度より故郷である福島県南相馬市に戻り、教員をしています。辻さんからの福島からの便りをどうぞ。

大阪で、地元の話をして恐縮です。でも、できる限り情景が伝わるように努めて書きたいと思っています。

私が住んでいる福島県の沿岸の、相馬地方にはかつて、潟（ラグーン）がいくつも存在していました。海は陸へと踏み込んで入江を形成し、潮がさせば隠れ、引けば現れる、海と陸との曖昧な境界が、風光明媚な景勝を象っていたのです。

記録を調べ、実際に歩いた限りでは、松川浦、新沼浦、八沢浦、金沢浦、井田川浦という、八つの大きな潟があり、そこでは海水と淡水が交わり、イサザ、コイ、ウナギ、ウニ…といった生き物がすまい、漁や製塩を生業とする人々が暮らしていました。土用の頃になると、暑さに敵わない井田川浦のウナギたちは、海水と真水が交わる、涼しいところに避難していきます。二つの竹筒を結わえて、海に垂らしておけば、まだ日が昇る前に、ウナギがどれどれと入り込んでくるので、漁師たちは繋げていた縄をひょいと引っ張り上げて、竹筒に入り込んだウナギをとっていたのでした。

しかし現在は、たった一つしか残っていません。相馬市にある松川浦だけです。

残りは全て、明治から大正にかけて干拓されてしまいました。潟は田畑に変わり、入江の風景も、生業も、魚も、貝も、船を作る技術も、地域に根付いていた信仰も、失われてしまいました。そして、つい100年前の暮らしを語れる人も、ほとんどいなくなってしまいました。

どうも私たちは、海の懐深く入り込みすぎ、海に抱かれた場所で暮らしていることを、忘れていてしまったのかもしれません。津波の被害が甚大だったのは、かつての潟が中心でした。故郷を、２度、３度と奪われた人もいたことでしょう。１度目は、干拓で。２度目は戦争で。３度目は津波と原発事故で、といったように。

学生の頃、私は大阪に住んでいたので、大阪が水に恵まれた地域であることはよく知っています。きっと、昔は海だったり、川だったり、潟だったりした場所が、ところどころにあるのかもしれません。もし津波がきたらどうなるのだろうかと、遠くから心配しています。

10月のイベント情報

※場所の記載がないものはとよなか国際交流センターで開催します。

外国人のための防災フェア
10月20日(土)
10:00～14:00
会場:豊中人権まちづくりセンター
(阪急岡町駅より徒歩10分)

人工呼吸・AED・地震体験などの防災教室と炊き出し体験など。多言語無料相談会も開催。

対象:外国人(日本人の同伴可)
定員:80人
参加費:無料
申込み:多言語相談会のみ10月18日までに来館または電話・FAX受付。

哲学カフェ「ともだちとは」
10月27日（土）
10:30～12:30

大阪大学学生・萩野彩香さんの進行で、「ともだちとは」をテーマに話しあう。

定員:15人(先着順)
申込み:来館・電話・FAX受付。

おまつり地球一周クラブ エクアドルを知ろう
10月27日(土)
10:00～12:00

エクアドル出身の講師から話を聞き、ゲームなどを体験。

対象:小・中学生
参加費:300円
定員:15人(先着順)
申込み:10月23日までに来館・電話・FAX受付。

登録グループの活動紹介

No.9 中国語レッスン

とよなか国際交流センターには、市民による自主的な国際交流活動を支援するための登録グループ制度があります。今回は中国語レッスンを立ち上げた辻村さんに、実際の活動内容や国際交流への思いを伺いました。

――インタビュアー：(以下、――)辻村さんがとよなか国際交流センターに初めて来られたのはいつ頃ですか？

辻村：日本の小・中学校に中国語の通訳として行ったのが10年以上前なので、センターに初めて行ったのもその頃だったと思います。もともと日本の会社で貿易と通訳・翻訳の経験があって、中国の会社でも働いていました。そのあと、豊中市内の小・中学校や大阪の府立高校で中国語の講師もしていたので、この経験を生かして、中国に興味がある方に中国の習慣と生活・文化の違いを伝えられたらいいなと思って中国語レッスンを立ち上げました。主な活動は中国語の習得と会員同士の交流やコミュニケーションですが、定期的にみんなで中国料理を作ったりもしています。だいたい毎回5～6人で楽しくやっていますね。

――自分でグループをつくるのはすごく大変じゃなかったですか？

辻村：そうですね。でもみんなで一緒にやっているうちに楽しいというか、もっとやりたい気持ちが出てきますね。それぞれの習慣や文化が違うので、日本では当たり前のことが全然通用しない経験も多いですから。生徒の中にはサラリーマンの方もいて、いつか中国に転勤するかもしれないとか、将来を考えて学んでらっしゃる方もいます。

――活動を始めて良かったと思う時ってどんな時ですか？

辻村：メンバーのなかで中国に行った人が、向こうの新しい情報とかをみんなで共有してくれるんです。それはすごく嬉しい。中国についての情報もそうですが、それに限らずみんなで情報交換ができるので、私もわからないことが聞けたり、生活に役立つ情報から個人の悩みまで、ひとりで抱えずに解決できたりするんですよね。

――そのときに一緒に考えられる人がいるというのがいいですね。

辻村：そうですね。たぶん1人だったら家にこもって考えちゃうけど。みんなで考えて、じゃあこれやってみようとか。あとは積極的に、男の人ってなかなかごはん作らないから、こちらからちょっと教えたりとか(笑)。主婦の方も、ここで習った料理を家で作ったら家族の人も喜んでくれたみたいで、そういう話を聞くと、活動してきてすごく良かったなと思います。

――座って学ぶ座学だけじゃなくて、みんなで餃子をつくったり実際にやってみるのがいいですよね。

辻村：中国の歌を歌ったりとかもします。中国について色んな面から学ぶことで、みんなの心がどうやったら豊かになるとか、より生活が楽しくなるとか、そういうことを心掛けながら活動しています。

――最後に、ひとことアピールをどうぞ！

辻村：みんなで楽しくやっているので、いつでも見学可能なのでぜひきてください！料理教室の参加も大歓迎です！

【活動についての問い合わせ先】
団体名：中国語レッスン
TEL：090-6733-4021
mail：tsuyaka40to@yahoo.co.jp（辻村）
活動日時：毎週日曜日
初級18:00～18:50、中級19:00～20:00

とよなか国際交流センターおしらせ
「こくりゅうだより」第114号(2018年10月号)
発行元・問い合わせ:(公財)とよなか国際交流協会
〒560-0026 大阪府豊中市玉井町1丁目1-1エトレ豊中6F
阪急宝塚線豊中駅すぐ
開館時間:9:00～21:30(貸室受付は20:00まで・水曜休館)
TEL:06-6843-4343 FAX:06-6843-4375
E-Mail:atoms@a.zaq.jp
WEB:http://www.a-atoms.info/

多言語情報も配信しています！

SNSも随時更新中！
「とよなか国際交流センター」で検索！